



## Veritas No.21-22(2003.3.19)

### 目次 (敬称略)

#### <図書館と私 卒業生特集>

- 矢部 智子 (文学研究科)
- 井原 麗奈 (総合文化学科)
- 内藤 雪子 (音楽学科)
- 木本 陽子 (人間科学科)

#### <研究室から>

- 茂木 むつみ

#### <オルチン文庫にある「讃美歌集」について その五>

- 茂 洋

#### <図書館からのお知らせ>

無断転載を禁ず

## <図書館と私 卒業生特集>

### ●「学びの場」である図書館

矢部 智子 文学研究科英文学専攻

『図書館』を広辞苑で調べると「図書・記録その他の資料を収集、整理、保管し、必要とする人の利用に供する施設」とある。確かにその通りなのだが、学生時代、私にとっての図書館は、それが全てではなかった。

六年前、私は本学院の英文学科に入学した。英文学科である以上、当然ながらテキストは英文である。もちろん原書で読むべきで、訳本は邪道だ。しかし、恥ずかしい話だが、私は訳本を入手しようと、図書館内をよく探して歩き回った。言い訳ではないが、訳本探しに奔走した学生は、数多くいた。おかげで、同じ授業を受講している学生の中に、妙な連帯感が生まれたりもした。たまに訳本がない時は、皆で苦しんだ。訳本に限らず、課題にしても、図書館で調べる必要があるものばかりだったように思う。自分が調べようと思っていた本が貸し出し中であった時は、理不尽な苛立ちを覚えたこともあった。数々の思い出があるが、当時、私にとっての図書館は、まさに「単位をとるために必要な場所」だったのだ。

しかし、はじめは受身であった私も、何度も図書館に「行かされる」うちに、徐々に図書館に主体的に「行く」ようになっていった。

「図書館に行ってくるね。」

「空き時間に、図書館で勉強するわ。」

「図書館で、本を借りてこないと。」

時が経つにつれて、このような台詞が板につき、図書館通いが習慣となった。先生方の狙い通り、なのかもしれない。文字通り、図書館が「学びの場」へと変わったのである。

神戸女学院の図書館は、「学びの場」にふさわしく、非常に環境がよい。まず、見た目にもあたたかい木製の机は、一人で使うにはもったいない程に大きい。おかげで、どれだけ大きな本を、何冊積もうとも、勉強に何らさしつかえはない。ちょっとした学者気分さえなれる。実際、図書館に行けば、参考本などを山積みにして勉強する学生の姿を必ず見る事ができる。もちろん、彼女らの表情は、決して楽しそうというわけではない。たまに、うつ伏せで寝ている時もある。しかし、集中して勉学に励む姿は、構内で見かける姿よりも数倍賢そうに見えた。

図書は、大型本から単行本まで、和書、洋書、ともに充実している。さらに雑誌や新聞といった資料も含めれば、膨大な量である。そして、これらの蔵書全てを、コンピュータで瞬時に検索できるのもありがたい。といっても、私自身、修士論文の執筆の際に、三十年前の New York Times を、難なく入手できた時は、さすがに驚いたが、学内で保管していない図書や資料も、相互利用を活用すれば、ほぼ確実に手に入る。もちろん、特に目当ての本がない場合でも、広い図書館を散策していれば、思いがけない本と出会う事もできる。在学生はもちろん、新入生の皆さんも、神戸女学院の図書館を、ぜひ「学びの場」として活用してほしい。

## ●私のお気に入りの場所

井原 麗奈 文学部総合文化学科

私には、学校の中でお気に入りの場所が二つある。一つは図書館本館の閲覧室、そしてもう一つは図書館新館の地下の閲覧室。女学院に入学した時に先生から、どういうわけか「この学校の中で自分のお気に入りの場所を見つけなさい。」とアドバイスされ、なんとなく意識して探しているうちに、この二カ所が私にとって落ち着ける場所だと思えるようになった。

まず、本館の閲覧室へは主に手紙を書いたり、レポートを書いたりする時に行くことが多い。特に真ん中テーブルの中庭が良く見える場所が私の指定席で、そこに座ってまず手元のライトを点ける。見るからに古くて、もう電球なんて切れているのではないかと、毎回心配しながら紐をひっぱっている。しかし、この4年間一度も電球が切れていたことはなく、古いものが現役で活躍していることに深い意義を感じながら、執筆に取りかかる。静かな空間の中で、窓から見える豊かな自然を眺めていると、不思議と良い文章が浮かんでくるものだ。

次に新館の地下閲覧室。ここにはもっぱら調べ物をする時に行くことが多い。そこには当日の新聞だけでなく、過去の新聞の縮刷版も置いてあるので、ESS部でディスカッションの活動をしていた時に良く利用した。

まず、図書館に入ると1階のパソコンに直行して検索し、上の階に行って自分のお目当ての本を探す。それが見つかったらそのまま地下へ行き、読みながら必要な箇所付箋を貼る作業をする。いつも人が少なく空いているから、広い机を独り占めして、借りて来た資料を思う存分広げられるのが、この場所の好きなところ。しかし暫くすると大抵睡魔に襲われる。そんな時は無理をしない。欲望に任せて机に伏せる。机の大きくて緩やかなカーブが身体にフィットして気持ちがいいのである。4年の間で、私は何度あそこで居眠りしたことか。

あとは夢うつつで貼った付箋の箇所をコピーして帰るのだが、その時も少しだけこだわる。私は柱の影より、窓側にあるコピー機を選ぶ。柱の影のコピー機は通行の邪魔をしているようで、なんとなく落ち着かないのに比べ、窓側のコピー機は奥にあるためその心配もないし、機械が新しいから速くて綺麗にコピーできるもの魅力的！

皆さんの中には、もしかしたらこんなこだわりを、くだらないとお思いになる方もいらっしゃるかもしれない。しかし、このこだわり事こそが、明らかに私の大学生活を快適で豊かなものにしてきているのである。

## ●音楽学部図書室について

内藤 雪子 音楽学部音楽学科

音楽学部の学生にとって、図書館を利用する理由の大半は楽譜を借りることでしょう。もちろん、私もその1人です。

大学に入ってから四年間で、知らなかったたくさんの曲に出会いました。コンサートで耳にしたものや、友達が弾いていたもの、先生にすすめられたものなど様々でした。「どんな楽譜なんだろう？」と思い、実際に欲しくなった楽譜の数はハンパじゃありません。それらを探しによく図書室の中をうろうろしていました。

何しろ膨大な数の楽譜が図書室中にあるのです。一回生の頃は、置いてある場所が分からなくて行きあたりばったりうろうろ。ドイツやフランスなど外国で作られた曲の題名を日本語でしか知らなかったりすると大変です。洋書が並んでいるとどれがお目当ての楽譜なのかさっぱり分からないんですから。仕方なくまず原語の題名を調べて、また元の棚へ戻る。まあ、図書室の中にはそんなことを調べる材料がいくらかでも並んでいますから困らないんですけど。それに、そうして調べ上げた題名は自分でも驚くぐらいすぐに覚えられます。私は英語と仏語しか知りませんが、独語の題名も簡単に頭に入りました。

楽譜というものは、同じ曲でも複数の出版社から出版されています。それぞれ指づかいやペダルのふみ方が異なっていたり、それぞれ独自の解釈や注釈を加えていたりします。主に実技試験の曲など、多くの考察を加えなくてはならない場合、色々な楽譜を見ることは私にとって大事なプロセスでした。授業の空いている時間に図書室で勉強していました。同じように作曲家の伝記を読んでいる人などがいて、楽しかったです。

音楽学部図書室の魅力といえば、大量のCDでしょう。本や楽譜に興味のない人でもよく利用していました。ただ、何度となく返却されていないCDを見つけました。しかもよく皆さんが聞きたいだろうと思われるものが紛失していて。あと、見当違いな場所に戻ってしまったりして、ご迷惑をかけたかもしれません。

あと、細かいことですが有り難かったのは、学生の昼休みと図書室の昼休みがずれていたことです。昼休みの長い時間に調べ物をしておいてから次の授業へ、ということをよくしました。図書室の方が同じ時間に休憩をされていると、そうはいきませんでしたね。

四年間で色々図書室にお世話になりました。ずるずる延滞してしまったことも何度か……。それにしても、せっかくコンピュータ管理されて検索しやすくなったのにもう卒業というのは少し悔しいです。早くCDやレコードもデータ管理されるようになるといいですね！

## ●図書館と私の学生生活

木本 陽子 人間科学部人間科学科

神戸女学院大学の図書館—そこは、私にとって、なくてはならない場所であり、図書館の存在をなくして、学生生活を振り返ることはできません。

KC の図書館をどのように活用してきたかについては、一言では申し上げられないほどで、本当に様々な形でお世話になってきました。私の場合、1・2回生の時と、3・4回生の時とでは、図書館の活用の仕方が変わったと思います。1・2回生の時は、授業数も多く、その分、授業と授業の間の空き時間を友人達と予習をして過ごすことが多かったように思います。3・4回生になると、予習というよりも、調べ物をするが多くなり、コンピューターによる雑誌記事検索をよく利用しました。図書館には、英文の雑誌記事検索ソフトもあり、日本では、あまり先行研究のない卒業研究を行う場合などは、なくてはならないものだと思います。私は、人間行動科学専攻なので、PsycINFO という、心理学に関する英文の論文検索ソフトを利用したりしました。また、図書館では、ノートパソコンの貸し出しが行われていて、本を横に置きながら、ゆっくりとパソコンを打つこともできました。

KC の図書館には、多くの製本された論文が書庫に保管されていますが、KC の図書館にない論文は、他大学から、複写を取り寄せてもらうことができ、この「相互利用」制度は、とてもありがたいものでした。KC の書庫には、論文だけでなく、絶版になり、もう、本屋さんでは手に入らない古い本や、街の図書館にもない本があることも多く、普通なら、絶対に巡り合うことのできない本を読めることは、とてもうれしかったです。そして、「相互利用」の手続きや書庫からの本請求にあたっては、司書の方々に、大変お世話になりました。

今、私は、どのように図書館を活用してきたかについて、ざっと4年間を振り返ってきました。しかし、私自身が図書館をどのように活用してきたかということについて、一番、思うことは、「学生生活を図書館と共に送った」ということです。私にとって、図書館とは、学ぶだけの場所ではありませんでした。授業数が減り、会う機会が減ってしまった友人と偶然、図書館で会えることも、とてもうれしかったです。図書館に立ち寄りなければいけない用があるわけでもないのに、私は、ほんの10分ほどでも、よく立ち寄って、1階の椅子に座り、きれいなカラー写真の載ったファッション雑誌を眺めながら、ゆっくりリラックスすることもありました。私の学生生活のスタイルは、「大学に行けば、図書館に行く」というようになっていました。図書館のどの場所も好きでしたが、1階の閲覧室が特に好きで、明るい陽の差し込む窓辺に座っていると、本当に清々しい気分になりました。

図書館といえば、「学びの場」、「勉強」というふうに、つい、おもってしまいがちですが、私にとって、KC の図書館は、「学ぶ」ということを中心として、私の学生生活を形作り、楽しく、また、充実したものにしてくれた大きな存在です。この原稿を書き終えようとしている今、いかに、私の学生生活が図書館によって支えられてきたかということに改めて、強く感じます。私に

とって、神戸女学院大学には、理学館をはじめ、多くの思い出深く、大切な場所がありますが、図書館がそうであることは言うまでもありません。また、これからも、私にとって、そうあり続けると心から思います。

## <研究室から>

### ●アメリカ音楽大学生活

茂木 むつみ Bryant and Alberta Drake 客員教授

私が勤めているコロラド大学は学生数二万五千人程の大規模な総合大学です。教育機関であると共に研究機関でもありますから、教授の契約も普通は教育 40%、研究 40%、学務 20%となっています。私のような演奏家は演奏が研究と見做されます。昇進や毎年の昇給もこの三分野の評価で決まりますが、大きい大学ほど、良い教育者であることよりも著名な研究者であることの方が重視されるという傾向は否めません。

学内や地元での演奏活動は殆ど評価されないのですが、そこでこそ自分が本当に取り上げたいプログラムに挑戦することができますし、学生達に刺激を与える良いチャンスなので、多くの教授が意欲的に学内で演奏会を開きます。私も毎学期二回位は声楽の伴奏や室内楽で出演します。コロラド大学では毎週火曜の夜に Faculty Recital Series があり、毎回足を運ぶ地元の聴衆がたくさんいます。勿論無料で、その上コンサート終了後のレセプションでは、出演者を囲んで誰もがパンチとデザートなどを楽しむことができます。

アメリカの地方都市の大学では学生も教師も大学付近に住み、多くの時間を大学で過ごします。音楽学部の学生は平日も週末も夜遅くまで学内で練習します。教師が学生以外のレッスンを学内ですることは禁じられている所もありますが、実際は黙認なので、夜でも週末でも教授たちが練習、レッスン、研究、授業準備、学務などにいそしむ姿が見受けられます。

図書館も頻繁に使用されます。教師は課題に必要な資料を、図書館の書籍のみならず個人で所有している資料まで、まとめて図書館に預けておいて学生に使わせることが間々あります。コロラド大学図書館の開館時間は月一木は朝 8 時から夜 10 時。金曜は週末の始まりなので 5 時まで。土曜は正午から 5 時。日曜は午前中は教会などへ行っても午後からは翌週の準備や宿題で忙しくなるので正午から夜 10 時までです。帯出は学生も教師も何冊でも可。貸出し期間は学生は四ヶ月、教師は六ヶ月。ただし他の人がリコールした場合は二週間以内に返却です。返却期間が過ぎると学生は一日 25 セントの罰金です。罰金の上限は 10 ドルですが、払わないと次の学期に登録できない、卒業証書がもらえない、成績証明書を出してもらえない、など厳しい制裁があります。

私が気に入っているサービスは Interlibrary Loan (相互利用) です。自分の大学図書館にな  
い本をインターネットでリクエストすると、他の図書館から送って来ます。絶版の楽譜がリクエ  
ストの二ヵ月以上後にザルツブルグのモーツァルテウムから送られて来た時は感激しました。通  
常は一週間程で返送するのですが、全て大学図書館が無料でやってくれます。

私が博士課程で学んだミシガン大学は更に大規模で格も高い大学でしたから図書館も大層立  
派でした。音楽図書館も非常に充実していた上に、博士課程の学生はそれぞれ専用の机が与えら  
れ、そこに必要な本を積んでおき、邪魔されずに勉強することができました。

アメリカの大学は学生にも教師にも厳しい要求をするけれども、図書館を含めた設備がそれを  
十分に支えてくれるのが、居心地が良い理由の一つだと思っています。

## <オルチン文庫にある「讃美歌集」について その五>

茂 洋 本学名誉教授

明治7年にプロテスタントの各教派が、数多くの「讃美歌集」を発行しました。その内で最も  
早く発行されたのが、前に少し詳しく説明した摂津第一公会(神戸教会)の讃美歌(06)でした。  
神戸、大阪を中心に展開する組合教会の讃美歌集の流れの始まりです。一方横浜、東京中心で長  
老派の讃美歌集の流れがありますが、幸いなことに、この両者は讃美歌集の編纂と聖書の翻訳に  
ついては、大変よく協力しました。それには両教派のアメリカからの宣教師たちの協力と、優れ  
た日本語を生み出した奥野昌綱と松山高吉の努力が大きな力となりました。もう一つ見逃せない  
理由があります。それは、横浜と神戸は両方とも日本開国の窓口となる港をもっていたことです。  
特に横浜の港の近くに住んだヘボン宣教師と、神戸の港からさほど遠くないグリーン宣教師の家  
が主としてその拠点になったからでした。

讃美歌集の流れを簡単に説明しておきましょう。できれば Veritas 17号にある「各教派別の  
讃美歌集の流れ」を参考にして下さい。横浜で最初に発行された讃美歌集は日本基督公会(横浜  
海岸教会)の讃美歌集「教のうた」(20)です。ルーミスと奥野が編集したもので、歌が19あ  
ります。とても面白いことに、次に神戸の組合教会讃美歌集がベリー編集の「無題」(09)で、  
歌33、讃詠6あるのですが、はじめの19の讃美歌は「教のうた」(20)をそのまま用いてい  
ます。きっと横浜で作った讃美歌集(20)の版木(まだ木版で印刷していました)をそのまま、  
船にのせて神戸に運び、そこでその後神戸で讃美歌を付け加えたのだろうと考えられます。こ  
の09の讃美歌集には、ローマ字版があり、そこにそれぞれの讃美歌に曲名がかかれていますので、  
どの曲で歌おうとしたか確認できるのです。

横浜では、住吉町に出来た長老派住吉町教会のための讃美歌集「讃美歌(さんびのうた)」(2  
1)が、これもルーミスと奥野の編集で、熊野雄七が書いたものがあります。歌20と頌栄1あ

ります。この讃美歌はまた、神戸の「三びのうた」(11)(1875年発行、デフォレスト編纂)に影響を与えています。この讃美歌集は歌34、讃詠6あります。そしてそれぞれの讃美歌に曲名が付されています。

その翌年1876年(明治9年)には、横浜で「改正讃美歌」(22)(編集者不祥、歌53、頌栄2)が出版されました。これは翌1877年(明治10年)に長老派の教会が合同して出来る日本基督一致教会(のちの日本基督教会)の讃美歌集として用いられたと考えられます。曲名も印刷されています。その讃美歌集は、1879年(明治12年)神戸もしくは大阪でカーティスによって編集された組合教会讃美歌集「さんびのうた」(13)(歌57、讃詠6)に影響を与えています。そしてこの讃美歌集は、日本基督一致教会の讃美歌集「讃美歌 全」(24)(1881年東京で発行、歌103)に大きな影響を与えているのです。

このような流れの中で、大変特徴のある讃美歌集が生まれました。それは、大阪で出版された「讃美歌并楽譜」(15)(1882年・明治15年)です。ここではじめて全部の讃美歌に、木版ではあるのですが、五線紙による楽譜が付いたのです。これは画期的なことでした。そしてこのような讃美歌集の流れに刺激されて、文部省がはじめて「小学唱歌」を出版しました。

「讃美歌并楽譜」(15)は、「さんびのうた」(13)を編集したのと同じ組合教会宣教師カーティスの努力によるものでした。彼は手紙の中に次のように書いています。「この讃美歌集のために昨年一年間一生懸命勉強しました。いままでにもいくつかの讃美歌集が印刷されてきましたが、この讃美歌集こそ最初の楽譜つき讃美歌集であると信じています。」歌130と歌詠之文12と楽譜が71あります。その五線紙は、木版で作られているために、不明瞭なところが何箇所もあります。実際この木版による五線紙の作成は困難を極めたようで、そのために出版が一年遅れて、明治15年出版となりました。同じように「小学唱歌集」も実際の出版は明治15年だったにもかかわらず、印刷には明治14年となっています。

この内容は次号で説明しましょう。

「讃美歌并楽譜」(15)の表紙

「美国」はアメリカのこと





はじめての「小学唱歌集」の裏表紙

発行が明治14年とありますが、本当は明治15年



### <図書館からのお知らせ>

今年も新しい卒業生たちを送り出す季節になりました。明治8年(1875)アメリカから来た二人の婦人宣教師によって始められた本学院は、今年で128周年を迎え、現在まで多くの卒業生を送り出してきました。明治15年(1882)第一回卒業式において12名の卒業生が各自の論文を朗読し、参会者一同に深い印象を残したと『神戸女学院百年史 総説』(昭和51年(1976)発行)に記されています。明治28年(1895)からの卒業時作成論文の一部が本学院図書館に所蔵されています。しかし、紙の劣化やインクの退色の恐れがあるため、より良い保存と利用を目的として、今年度よりこれらの資料をデジタル化しCD-ROMに移す作業を始めました。年代・劣化の程度などを考慮して普通科(現在の中高部)より進めています。

リボンでまとめているもの、鋏でとめているもの、本文のみのも、表紙のあるもの、など形態は様々です。テーマも“Necessity of scientific investigation”、“Japanese painting”、から“My school life”、“Why we need to learn English”、“Kobe College in 2000”など多岐にわたっています。当時の学院、学生気質や生活などを見ることが出来ます。2003年5月より図書館本館2階カウンターにて利用できますので、100年以上前の卒業生たちの書いたものをぜひ一度ご覧ください。

また今回、第一代校長タルカット先生から第五代院長デフォレスト先生までの関係資料の一部もCD-ROMにまとめました。あわせてご利用ください。